

新連載

よみがえる彩色

欲喜院聖天堂

第5回 聖天堂の彫刻③ 三聖吸酸

聖天堂の奥殿の南側上部、**辨蔵風**の下には、三人の聖人が一つの瓶を囲んでいる彫刻(写真)があります。これは、孔子、釈迦、老子が酔をなめて、その酸っぱさを共感している様子を表現したものであり、「**三聖吸酸**」という中国の故事に由来しています。つまり、酔が酸っぱいという事実は皆同じであり、儒教、仏教、道教など、宗教や思想が異なっているととしても、真理は一つであるという「**三教一致**」を意味しています。

この故事のオリジナルは、儒教の**蘇軾**と道教の**黄庭堅**という二人の書家が、仏教の**仏印禪師**のもとを訪れた際に、**桃花酸**という酔をなめ、三人が共に顔をしかめたという逸話に基づいています。

「三聖吸酸」は、寺社建築や屏風絵などの題材として使用されることがあり、日光東照宮における**陽明門**の彫刻や、**海北友松**の「**琴山拾得・三輪園屏風**」(重要文化財)などにおいても見ることができます。



左から、孔子、釈迦、老子

聖天堂における三聖吸酸の彫刻では、三聖人が前方を向き、共に人差し指を立てながら、酸っぱさを確認するように口を小さく開けています。その表情はとても温和であり、親しみを感じることができます。

また、彩色に目を向けると、孔子の服装や中央の瓶、植物の彫刻などに使われている緑色は**孔雀石**を原料としており、その色合いからはとても落ち着いた雰囲気を感じさせています。これらの表情や彩色は、漆塗りされた周囲の木枠の中心に浮き上がり、独特の空間を作り上げています。まさしく、だれが目にしても「美しい」という事実がそこに存在していることが分かります。

◆江南文化財センター ☎ 048-536-5062 (山下祐樹)